

# ベトナムにおける忌日祭祀の歴史的变化

## ——北部村落における伝統の持続と変化——

川 上 崇

### 1. はじめに

ベトナムにはゾンホ (dong ho) と称される親族集団がある。ゾンホは父系出自を基礎に構成され、家譜 (族譜) を作成し、それに基づき祖先祭祀を行う。世帯においては長男が両親と同居し、生家を相続して祖先祭祀の役割にあたる。そのため家族は、理想的には直系家族を志向し、とりわけ長男による祖先祭祀の継承を重視する。かつては「香火」(huong hoa) という祭祀用財産が存在し、祭祀の存続を経済的に保証していた [Dao Duy Anh 2002 (1938) : 131-133]。以上は一般にいわれるベトナムの伝統的な家族と祖先祭祀の特徴である。

だがベトナム北部紅河デルタにある筆者の調査村では、こうした特徴に反し、祖先祭祀において長男を優先する原則は厳格に守られておらず、事情に応じて修正される。その傾向は祖先の命日を記念して祀る「忌祭」(gio) において顕著であり、現在では独立した弟が長兄から特定の祖先の祭祀を譲り受けて忌祭を組織する、いわゆる「忌祭分け」(chia gio) というかたちで発現している。

このように、筆者の調査村において理念と実態とが乖離する要因として、祭祀を支える経済的基盤の脆弱さをあげることができる。ベトナムの相続は伝統的に祖先祭祀の相続と財産の相続とにわけられ、前者は男性長子を最優先するが、後者は基本的に男子間の分割相続をとる [中西 1998 : 96-99]。また古老への聞き取りによれば、香火は調査村では限られた富裕層だ

けの特権であり、祭祀用財産を別に用意できる余裕のある家族はほぼ皆無であったという。このように同村では、祭祀の継承において長男相続をとりながら、長男への財産相続に祭祀用の割り増し分が明確に配慮されていなかった<sup>(1)</sup>。

だが後で詳しく述べるが、1986年に始まるドイモイ路線以降ベトナムは急激な経済発展を遂げ、調査村の人々の生活も以前に比べるとずっと安定した状態にある。そのため経済的な理由から、長男が祖先の祭祀を弟に託さざるをえないという状況に陥る可能性は少なくなっている。にもかかわらず筆者の観察では、村人から長男に祭祀を集中させようとする強い意識は感じられない。むしろ兄弟間での忌祭分けは、より増加しつつあるようにみえる。とすれば、ドイモイ下の同村には相続慣行とは別に、忌祭分けを生じさせる何らかの要因の存在が予想される。

以下本論ではこうした問題意識を念頭におきつつ、調査村における忌祭の変化を歴史的に跡付ける。そして現在観察される忌祭分けが成立する過程について、その背景を含めて考察する。注目するのはドイモイ下の経済変化が引き起こした兄弟間の軋轢である。ドイモイ以降、村における経済変化は祖先祭祀の場で代々遵守されてきた兄弟関係へも波及し、忌祭の運営をめぐる様々な問題を引き起こしている。本論では忌祭をとりまく諸状況の変化が彼らの関係をどう変え、どういった問題を引き起こしたのか、そのことと現在増加しつつある兄弟間での忌祭分けがどう関連するのかを具体的に明らかにする。そして、この一村落到ける忌祭の事

例を通じて、急激な社会変化の過程にある現在のベトナム村落社会で進行する伝統の持続と変化について考えてみたい。

### 調査地

調査村である「ドンホー村」(lang Dong Ho) は、バックニン Bac Ninh 地方を東西に流れる紅河の支流、ドゥオン Duong 河の堤防沿いに位置する (図1 参照)。ハノイからは北部最大の港湾都市ハイフォン Hai Phong に抜ける国道5号線を経由し、東北に約50キロメートルの距離である。行政的には、バックニン Bac Ninh 省、トゥアンタイン Thuan Thanh 県、ソンホー Song Ho 社、ドンケー Dong Khe 半行政村を構成する一集落である<sup>(2)</sup>。2002年の筆者による全戸調査によれば、村の人口は735人、174世帯で、1世帯あたりの平均人数は4.2名であった。

調査は2000年から2003年にかけて実施した。村での滞在調査は2000年4月から同年11月 (約8ヶ月間)、2002年9月から2003年3月 (約7ヶ月間)、2003年4月から同年7月 (約4ヶ月間) である。その後、2003年12月まで首都ハノイのゲストハウスに滞在し、週に1～2日の割合で村に通って補足調査を行った<sup>(3)</sup>。

ドイモイ以降、村の経済は大きく変化した。1986年、ベトナム共産党はそれまで歩んできた社会主義路線を大幅に修正する決断をする。市場経済化を柱とする改革路線ドイモイの採用である。

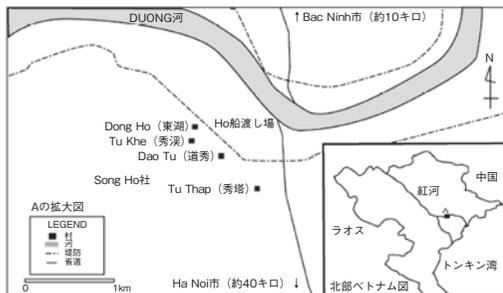


図1 調査村とその周辺 (2002年筆者作成)

それまでのベトナムでは国家による経済の一元的管理体制が敷かれ、物流は国家の厳しい管理下におかれていた。農村部では「合作社」(Hop tac xa) に代表される農業集団経営が実施された。そこでは経営主体である合作社が土地を所有し、生産を計画し、農民を組織して作業を遂行する。他方で、個々の農民は合作社の計画に従って集団労働に従事し、労働の報酬を受け取るのみであった。そのため、当時の農村では集団が生産と生活の重要な資源を握り、農民はあらゆる面で集団に依存せざるを得なかった。

だがドイモイ以降、ベトナム共産党は市場経済メカニズムに立脚した経済管理を打ち出す。農村では合作社による集団農業体制が事実上破棄され、新たに世帯が農業の経営主体として認められた。また経済活動の自由が保証され、農業に適さないところでは手工業や商業など農業以外の生業に就くことが奨励された。いわば国家は農民に職業選択の自由を保証し、場合によっては脱農という選択肢をも容認したのである。

こうした経済路線の大転換をうけ、村の経済は大きく発展した。その原動力となったのは、村に古くから伝わる木版印刷の技術を用いた「冥具」(hang ma) 業である。冥具とは衣服や日用品を模した紙製祭祀用品であり、死者や神を祀る儀礼の場で陰界での使用を願って燃やされる。農業集団経営期には低迷したが、ドイモイ下の商品市場の拡大により都市部を中心に冥具の消費が急増した。その結果、1990年代に入ると、冥具業は農業に代わる村の主生業として成長し、そこから得られる現金収入は村の暮らしを支える重要な経済的基盤となっている。

ドイモイ下の急激な経済変化は村の暮らしを変えた。それは消費生活の充実、とりわけ耐久消費財の所有の拡大に顕著にあらわれている。表1は、村で所有を希望する意見の多かったテレビ、オートバイ、電動式ポンプ付き井戸、固定電話、電気温水器の5品目について、全174世帯の所有率を示したものである。オートバイ

表1 耐久消費財の所有率 (n = 174, 2002年筆者作成)

項目	所有世帯数	割合 (%)	実数	単価 (米ドル) 注)
オートバイ	108	(62)	117	1000
電動式ポンプ付き井戸	80	(46)	80	200
テレビ	79	(45)	79	250
固定電話	54	(31)	54	100
温水器	6	( 3)	6	650

注) 表中の単価は聞き取りから算出した目安であり、新品と中古品を含む。なお電話は設置費用を含む金額である。

は、1992年に村の3世帯が商品の運搬用として購入したのが最初とされる。それが2002年時点では約60%の世帯が所有し、9世帯は2台を所有する。水浴用の井戸は手動汲み上げ式から電動式ポンプ付きの井戸へと変わりつつある<sup>(4)</sup>。テレビを所有する世帯は45%、農村部ではまだ十分に普及していない固定電話を所有する世帯は30%に上る。同表には載せていないが、冷蔵庫や洗濯機、さらには自動車を所有するなど、首都ハノイの富裕層に劣らない世帯も出始めている。

また村では新築ラッシュが続いている。ベトナムでは新築した年号を家屋の正面入り口の上部に刻む習慣がある。表2は全174世帯分の年号を、5年間隔で示したものである(表2参照)。同表をみると、ドイモイ政策が本格化した1990年から現在(2002年)までに新築した世帯の割合は76%にのぼることがわかる<sup>(5)</sup>。

さらに各世帯で催される諸儀礼もより盛大に、より華美に行われるようになってきている。結婚式を例にとろう。ドイモイ以前、結婚式に招く客といえばゾンホが中心であったとされるが、現在では村全体を招くことが常識となっている。客に振る舞われる料理も大きく様変わりした。ドイモイ初期には量が重視され、皿に如何に大量に盛るかが競われたという。だが近年では量より質を重視し、値は張るが地元では入手しにくい珍しい食材を用いた皿を如何に多く並べるかが関心となっている。また祝宴を盛り上げる余興にも力をいれる世帯が増えている。

表2 家の新築年一覧 (n = 174, 2002年)

新築年代	世帯数	割合 (%)
1936	1	
1970-1974	2	
1975-1979	3	
1980-1984	8	
1985-1989	28	( 16)
1990-1994	51	( 29)
1995-1999	55	( 32)
2000-2002	26	( 15)
合計	174	(100)

ドイモイ以前、余興といえば花嫁花婿の友人による合唱が定番であったとされる。だが現在では多くの世帯が貸し業者からレンタルしたビデオセットを会場となる庭に配置し、カラオケビデオを連日大音量で流す。プロの楽隊を招き、生演奏を披露するという世帯も出始めている。

以上述べてきた一連の現象の根底にあるのは、ドイモイ下の経済力向上を目に見えるかたちで表示したいという競争意識であろう。調査中よく村人は筆者に対し、ドイモイ以降、何をするにも「他人より劣っていない」(khong kem ai)ということに気をつけるようになったと述べる。特に若い世代の男性には、こうした意識を強くもつ者が少なくない。ちょうど筆者の調査中に家屋二階部分の増築を計画していた30代のある男性の意見は、そのことを如実に物語っている。

いまでは誰もが現金をもっていることは知っている。自分の招いた結婚式でだした料理より、招かれた結婚式の料理が劣っていたら、儲けているのにこの程度の料理しかださないと我々を軽視している、と隣人や友人から後で陰口をたたかれる。だから結婚式を経済力以上の規模で組織してしまう家も少なくない。でも他人より劣っていないということを示したいと考えるのは当然だよ。私もそう。昨年、弟のリンと友人のチャイン、ロックが家を新築した。私は経済的には彼らより劣る。だが私は彼らの家を何度も訪問して研究している。計画中の私の家は、外壁は当面は安価なタイルで我慢するとして、高さだけは彼らの家より少しでも高くするつもりだ。

こうした競争意識は、この男性の発言にあるように隣人同士だけでなく、結婚し独立した兄弟間でも適用される。その背景には、次に述べるような村における息子の独立過程や財産分与、その後の兄弟関係があるように思われる。

本論の導入部で、筆者は、ベトナムの伝統的な家族は長男が生家に残留し直系家族を形成する理想をもつと述べた。村でも長男が親夫婦と同居し、生家を相続して祖先祭祀にあたることが望ましいと考えられている。だがこれはあくまで理想である。実際には、家族ごとの個別の事情に応じて弾力的に運用される。

息子は結婚すると、両親から家屋の一間を居住空間として与えられる。そこで一定期間、息子夫婦は親夫婦と生活を共にし、冥具業も親の采配下で行う。そのため報酬は仕事の量に応じて親から受け取るのが普通である。その後、親夫婦と「食事を別にする」(an rieng)。別食は、村では親夫婦からの生計の分離を意味する。息子夫婦にある程度の経済的余裕ができると、今度は生家を離れて「居住を別にし」(ra o rieng)、完全に独立した世帯を構える。親が敷地内に新居を与えることが多いが、息子夫婦に

経済的な余裕があれば、別に土地を購入することもある。この別食と別住という分離の過程は、一人息子でない限り、長男であっても例外なく行われる。

息子夫婦の別食、すなわち生計の分離は、親からみると経済的自立を促すという意味合いが強い。通常、別食は息子夫婦が冥具作りのための一定の技術を習得した時点で行われることが多い。冥具の生産はとくに高度な技術を要せず、また生産に必要な道具は材料となる紙類と顔料、ナイフ程度で高額な設備は必要ない。また作業は紙の切り貼りが中心で、年齢や体力にかかわらず行える。農業でいう水の管理など協同行う必要のある作業もない。そのため一カ所に資本や労働力を集中して経営する利点はあまりない。むしろ若い夫婦で個別に行うほうが努力するので、商売が成功する可能性が高いと考える親は多い。そのため条件さえ揃えば、親はできるだけ早く息子夫婦と食をわけ、生計を別にするようである<sup>(6)</sup>。

財産分与は息子夫婦の分出の過程で、別食や別住などの節目に段階的に行われる。財産のうち、生家は祖先を祀る祭壇を含み、祭祀権の継承と深い関わりをもつ。だが村では、必ずしも長男が生家を相続するとは限らない。経済力を蓄えた長男夫婦が生家より立派な家を新築し、そこに親夫婦を招いて同居し、生家は弟に譲ることもある。兄弟が親元から順番に分出していき、最後まで残った末の息子が老親を扶養し、最終的に生家を譲り受けることも珍しくない。

生計を分け、別に居を構えた兄弟の世帯のあいだには原則として、日本の伝統的な家族制度にみられるような本支の別はない。両者は共に独立した世帯として対等な関係を形成する。

それは経済活動の場でも同様である。村では生計を別にしていれば同居する親子であっても、商取引は原則として経済的な合理性に基づき行われる。親兄弟だからと多少の融通をきかせることはある。だが相手の利益を優先し、商売上の不利益を被ることはありえない。むしろ

以下の例のように、親兄弟といった近親者との取引を避けることが多いという<sup>(7)</sup>。

私の商品を定期的に購入するのは5人の村人だが、兄弟など近親者はいない。一般に金がからむ商売では、兄弟同士は互いに避けあうものだ。市場で知り合いの豆腐が売れ残っていても、知り合いだからと買うことはない。万が一病気にでもなっても問題になったら関係修復が面倒だから。

村の各世帯はゾンホに組織される。現在ドンホー村は外来者を除くと、11姓のゾンホにわかれている。ゾンホは祠堂や族譜、近年では成員の優秀な子弟の奨学金にあてる基金といった共有財産をもち、ゾンホ全体の行事として年末の墓参り、後で述べる「始祖の忌祭」(gio to)などの活動を行う<sup>(8)</sup>。また役員として長男系の嫡孫がなる「族長」(truong ho, toc truong)の他、行事担当者として「料理長」(truong bep)が毎年1人ずつ選出される。

ゾンホの規模は、男子数でみると111人から15人までと大きな差がある。一般に、ある程度の規模になると「分支」(phan chi)に分かれる。分支は成員数や経済力等により勢力の消長を伴うもので、人数の減少により単独での活動をなしえなくなると、同列の多数集団に吸収される[末成 1998:264]。ドンホー村でも、たとえばD族は3支あり、1支が他の地域に移住したため現在2支が村に残るが、そのうちの1支も2世帯のみで独立して活動できないとして他の1支に編入された。

なお、忌祭は、始祖の忌祭と「始祖より下の世代の祖先の忌祭」(gio cac cu)に大別できる。前者はゾンホ全体の行事として、後者は忌祭を主宰する家の構成員を中心にゾンホの分支毎に行われる。本論で対象とするのは後者の忌祭である。始祖の忌祭については本論での議論とかかわる場合にのみ触れることにする。

## 2. ドイモイ以前の忌祭

忌祭は、死後1年目の命日に「最初の忌祭」(gio dau)を開催してから、その後、毎年欠かさず行われる。命日当日は朝早くから供物の用意が行われる。供物は祖先に捧げられたのち、参加者全員に振る舞われる。家の主人は供物の調理を監督する傍ら、祭壇の上を整頓し、皿に盛られた供物を並べていく(写真1参照)。

供物が揃うと、主人は正装して祭壇の前に立ち、祖先に対して祈誦を行う<sup>(9)</sup>。その後、近い親族や招待客が焼香を行う。焼香が済むと、すぐに宴会が始まる(写真2, 3参照)。供物が一斉に下げられ、料理を盛ったmam(お盆)が次々と運び込まれる。宴会は午前10時頃から始まり昼前には終わる。参加者が帰ると家の主人が庭におり、陰界へ戻る祖先にもたせる土産として紙銭や冥具を燃やす(写真4参照)。

### ゴップゾ制

始祖より下の世代の祖先の忌祭はゾンホの分支ごとに行われる。だが全員が祀られることはなく、ごく一部の祖先が祀られるだけである。その範囲は建前と実際とが食い違うため把握することは難しいが[末成 1998:282]、現在の



写真1 忌祭当日の祭壇(2002年筆者撮影)



写真2 宴会の風景 (2002年筆者撮影)



写真4 冥具を燃やし祖先に送る (2002年筆者撮影)



写真3 宴会料理の例 (2002年筆者撮影)

ドンホー村では現存する成員の最高世代の3代前、曾祖父母の代までである。それ以上の世代の祖先になると、ゾンホの始祖の忌祭で合祀されることが多い。また祭祀者により近い祖先が重視され、曾祖父母より祖父母、祖父母より父母と、その忌祭も盛大に行われる。

原則として長男が自己の直系祖先を祀る。そのため忌祭は、それぞれの祖先の命日に、その祭祀を受け持つ長男系の家で、その世帯の出費により執り行われる。それに参加者として傍系の人々、特に兄弟を中心とする近親者の世帯が

協力する。

村では、忌祭に協力する関係者を「家人」(nguoi nha) という。家人とは世帯レベルで行われる儀礼において、もっとも親密な協力関係をもつ範囲を指し示す用語である。その範囲はゾンホの分節化の程度や成員の居住状況により、ある程度伸縮するが、主人が所属する分支の範囲を超えることはない。また家人には父系関係者ではないが、外孫が含まれることもある。娘の長男が父親(婚)の代理として、母方の両親の忌祭に協力することはよくある。

家人の関係にある人々は供物の調理を手伝うだけでなく、米や酒を供物として主宰者に差し出し忌祭を経済的に支援する。その量は「心次第」(tuy tam) とされ、提供する側の経済条件や被祭祀者との系譜関係により多少変化する。だがこの供物の抛出は家人の責任と考えられており、手ぶらで参加することはない。この忌祭における抛出の慣行を村ではゴップゾ(gop gio) という。なかでも父母の忌祭での次男以下の弟たちを典型とする、被祭祀者の直系の男性子孫はもっとも重い責任を負う。彼らのゴップゾは原則として現金で行われ、金額も相応の額が期待される<sup>(10)</sup>。

このように忌祭の経費負担は長男だけに集中

せず、参加する家人のあいだで分散化される。祭祀用財産の不在や分割相続にもかかわらず、村における忌祭の存続が可能であったのは、ゴップゾ制による忌祭運営をとるためであったといえる。

### 忌祭分け

ゴップゾ制について説明するとき、村人は兄弟間の「情感」(tinh cam)、とりわけ兄弟間の助け合いの精神を強調する。情感とは相手を尊重し、思いやる感情のことであり、その根底には相互扶助の精神があるとされる<sup>(11)</sup>。忌祭の主宰者であり費用負担の責任者でもある長兄を、弟たちが労働力で、あるいは経済的に支援するという兄弟の在り方の強調である。

他方で、村人は忌祭を受け持つべき長男系の子孫ではなく、それ以外の者が組織することに対して厳しい目を向ける。特に父母の忌祭を次男以下が組織することは、長男の責任回避というだけでなく兄弟不和を露呈する最大の不孝として嫌悪される。

だが、これまで村においてこうした例が全く無かったわけではない。その主要な理由は長期にわたる経済的困窮であったという。特にフランス、アメリカとの相次ぐ戦争による社会混乱、そして社会主義化以降の経済政策の失敗は、深刻な経済の低迷を招きゴップゾ制による忌祭運営を困難にした。日々の食料にも事欠く暮らしのなかで、ゴップゾを毎回欠かさずに行うことは事実上不可能であった。またそうした事情を知る主宰者の側でも、家人からの経済的協力を期待し忌祭を行うことは躊躇われたとされる。

こうした状況に、通常、村では参加者を制限し、忌祭を小規模に行うことで対処した。例えば父母の忌祭には実の息子と娘だけが出席し、孫の代は呼ばず、娘の夫(婿)ですら参加しなかったという。また祖父母より上の世代の忌祭になると、女性は排除され、被祭祀者の直系の男性子孫だけで行われた。主宰者より世代が下であれば、直系であっても省かれたとされる。

誰にも声を掛けずに、主宰家の者だけで内々に行う例も少なくなかった。そのためドイモイ以前、忌祭の参加者は男性老人が中心であり、当時を知る村人によれば女性や若い世代の男性の姿をみることは稀であったという<sup>(12)</sup>。

また忌祭そのものの回数を減らすことも行われた。ベトナム北部には四代祭祀の理念があり、祭祀者は最高で4代前、すなわち高祖までを祀らねばならないとされる [Dao Duy Anh 2002: 245-246; 宮澤 2000: 187]。そのため代々長男が後継者となってきた家では、理念どおり祖先祭祀を実践すると1年に最低でも8回の忌祭を行う必要がある。だが村では4代を経るのを待たずに、曾祖父母の代で忌祭を打ち切るのが普通であった。祖父母の代でも、夫婦をまとめて一度の忌祭で済ませる例もあったとされる。

さらに忌祭を兄弟間で分担し合うことも行われた。ベトナムでは直系祖先以外にも、祀り手のない傍系祖先や妻方母方の父系祖先を祀る慣習がある。また離婚して生家に戻った娘は、死後、生家の方で祀られる。これらの靈魂は「遠い祖先」(cac cu xa)と総称され直系祖先とは区別されるが、その祭祀は長男系が受け持つ<sup>(13)</sup>。だが、直系祖先に加え、これらの全てを祀るとなると長男の負担は非常に重くなる。そこで長男が直系祖先を祀り、次男以下の弟たちが手分けして遠い祖先を祀るという具合に、祭祀責任を分担し合うことが行われた。

[事例1] タン(52歳)の兄弟は、病弱の長兄一家の経済的負担を軽減するため、1970年代から次のように忌祭を分担しあってきた。長兄キエム(1997年に他界)は父母、祖父母の4回、次男タンは未婚で他界した祖父の弟と父親の弟の2回、三男のバン(49歳)は未婚で他界した父親の2姉妹と、抗米戦争中に南部タイニン省で戦死した末の弟ソアンの3回。

一般に、血統の継承と関わらない遠い祖先

は、祭祀という点でも直系祖先に比べ重要度が低いと考えられている。長男系が祀る場合でも、「嗣子」(an thua tu)など特別な理由がない限り個別に忌祭を行うことはない<sup>(14)</sup>。また祭祀の永続性が問われることはないので2～3世代を経ると忘れ去られる。調査でも、こちらから確認しない限り触れずに済ませる村人は多い。遺影など故人の遺品を飾ることも稀で、祭壇を観察しただけでは分からない。そのため目立たないが、系譜図を基に個別に確認していくと意外に多く、事例1のような例は少なからずあると思われる。

また直系祖先であっても、次男以下の誰かが忌祭を受け持つことがあった。

[事例2] キン(60歳)は2人兄弟の次男である。1975年、長兄が病気で死亡。残された兄嫁と幼い子供達では祭祀を維持できなかったため、近親者で相談し、キンが父母の忌祭を受け持つことになった。それ以降、父母の忌祭はキンの家で行い、そこに兄嫁らが参加するかたちをとってきた。数年前、長兄の長男キエム(41歳)が「経済的に余裕がでたので忌祭を返して欲しい」といつてきたが、キンは「今まで私が受け持ってきた。お前には祖父母だが私にとっては父母、私の方が近いのだから死ぬまで預けて欲しい」と応じていない。

繰り返すが、父母の忌祭は長男のところで、兄弟共に協力し合って行うべきであるという意識は強い。だが事例2のように特別な事情で長男が忌祭を維持できない場合、次男以下の誰かが受け持つことがあった。但しキンの死後、嫡孫であるキエムへの祭祀の返還が予測されるように、次男以下による忌祭の主宰は一時的な措置である。このことで長男系と次男以下の系統の区別が紛れることはない。

さらにゴップゾの負担を兄弟間で分け合うことも行われた。

[事例3] ターイ(1971年に他界)は生前、長男チャン(52歳)の将来的な負担を軽減するため、外祖に対するゴップゾを次男と三男に受け持たせた。チャンは父母、祖父母、曾祖父母、抗米戦争で戦死したチャンの弟の忌祭を受け持つ。次男ティエン(48歳)はターイの母親の両親の忌祭にゴップゾを行う責任を、三男タン(46歳)はターイの妻の両親の忌祭にゴップゾする責任をそれぞれ受け持ってきた。

この例は、忌祭そのものを受け渡す事例1や事例2とは性格を異にする。だが長男の費用負担を兄弟間で分散化しようとする趣旨のものであり、忌祭の分受に通じるといえよう。

このようにドンホー村では、伝統的に、ゴップゾ制により経費負担を兄弟間で分散化し、また非常時には祭祀責任を分担し合う方法をとつつ忌祭を執り行ってきた。長男による祭祀の継承が原則であっても、現実にはそれを妨げる様々な障害が起こりうる。村人は、経済的に貧しい長男を弟が支援することは当然であると考えている。ただ、その場合に強調されるのは相続分に応じた祭祀上の権利義務の履行ではない。祭祀の存続を前提とした兄弟間の情感である。そして、その情感に支えられた忌祭の在り方が、村における祖先祭祀の伝統として強く意識されてきたのである。

### 3. ドイモイ下の変化

#### 参加者の拡大—招待客の増加

まずドイモイを境とする前後の変化として、村人が共通して指摘することは参加者の範囲の拡大である。既に述べた通り、ドイモイ以前の忌祭は被祭祀者の父系子孫を中心に営まれてきた。だが現在、忌祭には彼らだけでなく様々な関係の人々が参加する。注目されるのは主宰者の個人的な関係者が客として参加していることである。例えば親しい友人や商売上の取引関係者、上司や同僚など職場関係者が参加する。また主宰者が同年齢の在村男性で組織される「同

年会」(hoi dong nien) や戦友会に所属していれば、その全会員が招かれることも少なくない<sup>(15)</sup>。

村人の話では、忌祭に客を招くことは古くから行われていたという。だが、それは故人が生前に特に世話になった友人など、故人と関係をもつ限られた人々を招くものであった。現在のように被祭祀者と直接関係のない人々が忌祭に広く参加する状況は、ドイモイ以前の村では考えられないことであつたらしい。

忌祭に客として招かれた村人は、供物として酒や菓子類などを持参する。特に近年では、旬の果物1キロを持参するのが一般的となっている。その経緯について、60歳代の男性は次のように振り返る。

旬の果物を持参するきっかけをつくったのは同年会。同年会が初めて忌祭に招かれたときだと記憶している。1994年から1995年ごろではないか。彼らは故人に敬意をあらわすため、金を出し合って当時としては貴重品であった果物を供物に購入し持参した。それをみた他の参加者が、祭壇が華やかになるとして真似始めたのだ。村が経済的に豊かになり、北部各地から農村部の市場にも果物が流入し始め、手に入りやすくなったことも理由だろう。

だが客の増加は、そのまま主宰家の費用負担の増大を意味する。日本と同様に現金での祝儀や香典を期待できる結婚式や葬式とは異なり、忌祭に招かれた客が持参するのは果物だけである。そのため主宰家は、忌祭の費用、具体的には参加者に振る舞う宴会料理の費用のほぼ全額を負担しなければならない。

現在、複数の忌祭を受け持つ長男系の家では、1年に1度だけ、客を招く盛大な忌祭を催す。そして、それ以外の忌祭を、ドイモイ以前と同様に限られた子孫だけで小規模に行う。その結果、村における忌祭をその規模にのみ注目

すると、極端に大規模な忌祭と小規模なものとは併存し、忌祭の二極分化が起こっているようにみえる。

具体的な例で示してみよう。村における宴会は男女が別々に、mam (mam) と称される大盆を5名で囲んで食べる形式をとる。そのため忌祭の規模は、宴会で用意されるmamの数により正確に知ることができる。表3は調査中、筆者が滞在していた世帯で1年間に行われた4回の忌祭とそのmam数を示したものだが、客を招いた父親の忌祭の規模だけ突出して多いことがわかる(表3参照)。

客を招く忌祭を言い表す特別な名称はない。ただ「盛大に行う忌祭」(gio mo mang) と表現されるだけである。儀礼的な手続きの点でも他の忌祭と変わることはない。

だが、この忌祭に対する主宰者の構えは明らかに違う。彼らがもっとも重視するのは宴会での客への饗応である。手抜き無く客に應對し、如何に美味しいご馳走を振る舞い、客に満足して貰うかに細心の注意を払う。そのため主宰者を務める年頃の男性は、宴会料理の流行に敏感である。客の舌を飽きさせない工夫だとして、割高な仔牛の肉や鳩肉など地元で手に入り難しい食材を用いる者も少なくない。

盛大に行う忌祭には祭祀上、もっとも重視される父親か母親の命日があてられることが多い。だが近年では、接客の都合を優先して忌日の主を決めるという者も出始めている。以下に述べる村のある長男系の男性(42歳)の意見は、こうした主宰者の態度を如実に物語っている。

表3 ある世帯の忌祭で用意したmam数  
(2002年筆者作成)

忌日(陰暦)	被祭祀者	宴会で用意したmam数
2002,09,17	祖父	2
2003,01,24	父親	19
2003,01,29	母親	1
2003,07,19	祖母	2

盛大に行う忌祭には誰の命日をあててもよい。「社交」(doi ngoai) のために行うのだから。客がゆっくり酒を楽しめるよう、仕事が忙しくない時期を忌日とする祖先の忌祭をあてる。

忌祭参加者の拡大、特に招待客の増加は、ドイモイ時代のドンホー村を象徴する現象である。筆者の主要なインフォーマントのひとりであるフー氏(45歳)は、主宰者が忌祭に自らの客を招くようになった理由について、都市と村落における社会生活の違いを例にあげつつ次のように説明する。

都市での生活とは異なり、村落では結婚式や葬式、また病気や不意の事故に見舞われたときなど、様々な機会に親族や隣人、友人たちの協力をえる必要がある。村の暮らしはこうした助け合いのうえに成り立っている。日頃お世話になった人々を年に一度ぐらいい自分の家に招き、御馳走して感謝の気持ちをあらわし、彼らとの情感を深めたいと考えるのは当然だよ。

忌祭に客を招くという行為は、村の経済が上向き始めた1990年代、フー氏と同じ意見をもつ村人によって始められたのであろう。忌祭は原則として毎年繰り返し行われる。冥具業の成功により経済力を蓄えた人々が忌祭のそうした性格に注目し、本来の目的である祖先供養の場に加え、より広い範囲の人々との信頼関係を深める場としても利用し始めたのである。いわば、ドイモイ下の経済力向上が忌祭の用いられ方の変化をもたらしたのである。

この招待客の増加現象には、もうひとつ村の伝統的な人間関係の在り方が深く関係している。人と人との付き合いにおいて、村人がもっとも重視するのは親密な「往来」(di lai) である。村では日常的に、様々な往来が観察される。親しい間柄の者は夕飯後に訪問し合い、その日

にあった出来事など世間話を行う。おいしい食材が手に入ったからと親兄弟を食事に招くことも珍しくない。また農機具や宴会用の食器など、モノの貸し借りなども頻繁に行われる。誰かが病気で寝込んだという知らせが入ると、翌日には多くの者が砂糖や粉ミルクをもって見舞いに訪れる。

村人は繰り返される往来を通じて、相手との情感を確認しあう。その過程で、彼らは相手をよく知り、互いの信頼関係を深めてゆく。そして結婚式など吉事では共に「喜びを分かちあい」(chia vui), 相手の凶事にはいち早く駆けつけ「悲しみを分けあう」(chia buon)。

だが日常的な往来は、誰彼を問わず無秩序に行えるわけではない。確かに気が合う、気が合わないといった個人的な相性に左右される部分はある。だが多くの場合、村人は相手との関係で意識的に往来の頻度や内容に濃淡をつけるという。なかでももっとも親密な往来を交わしあう間柄は、家人を中心とする限られた範囲の人々だけとされる。ゾンホでも自分の所属する分支の範囲を超えると多少の遠慮が生じるという<sup>(16)</sup>。

そのため、より広い範囲の人々と情感をやりとりし、相手との信頼関係を深めるには別のかたちでの往来が用いられる。それは宴会を設け、そこに客として招き合うという儀礼的な往来である。

ベトナム人の社会生活において、「宴会」(tiéc) は儀礼的な社交の場である。招く側と招かれる側の双方に、守るべき社交上のルールがある。すなわち宴会に客として招かれ饗応を受けた者は、相手に「口の負債」(no mieng) を負う。この借金は後日、宴会に客として招き返し、享受したものと同等かそれ以上のご馳走を振る舞い、饗応することで返済が完了する。この返済方法を「口の負債を返す」(tra no mieng) という。

村人は、この宴会での儀礼的往来が一方通行のまま継続されることを嫌う。「口の負債」を

負った側は、相手に対し、社会的に「恥ずかしく、屈辱的な」(nguong) 立場に陥ると考えるのだという。特に、忌祭は結婚式などの諸儀礼と異なり、毎年繰り返される。そのため往来が開始されれば、両者は毎年顔を合わせることになる。「口の負債」を負う側からみれば、社会的劣位な状態がより強く意識されるのであろう。

要するにドイモイ下に起こった忌祭における客の増加現象とは、村の経済力向上を背景とした忌祭の用いられ方の変化、そして儀礼的往来の重視に象徴されるベトナムの伝統的な社交論理との相乗効果により浸透していったのである。だがこの現象は、盛大に行う忌祭という新しいタイプの忌祭を生み出しただけでなく、村の忌祭運営を支えてきたゴップゾ制にも大きな影響をもたらしている。

### ゴップゾの変化

現在、次男以下の長兄に対するゴップゾには新しい取り決めが設けられている。次男以下が個人的な関係者を客として招く場合、彼らの飲食代を負担するというものである。

客1人の飲食代は料理費用をもとに算出される。ドンホー村の宴会料理は1マムにつき汁物3碗と主菜7皿と決まっており、これに酒とご飯がつく。その費用は年々高額化する傾向にあるが、2002年の調査時点では1マムあたり90,000ドン(6ドル相当)が相場とされる。そのため1人あたりの飲食代は18,000ドンとなり、次男以下はこの額を基準に、自らが招く客の数を掛けた総額を長兄に差し出すのである。

ただ、この計算方法で導きだした金額はあくまで目安である。多くの次男以下はこの金額に、多少の額を上乗せして差し出す。長兄夫婦から「計算に細かい」(chi li) とみなされるのを嫌うからである。そのため5名の客を招く場合90,000ドンで十分だが、普通は10,000ドンを上乗せして区切りのよい100,000ドンを差し出す。だが反対に、人数分の飲食代に満たない金

額を差し出すことはありえない。

現在、村の多くの世帯では客を招いて盛大に行う忌祭の数日前に、兄弟が集まって簡単な家族会議を開く。そこで招待客のリストを作成し、費用計算の基礎となる宴会料理の内容を決定する。特に次男以下の客がある場合、長兄は弟たちに必ず料理の内容や材料の金額について意見を求める。弟たちの側でも意見を述べることは当然であると考えている。

この兄弟間の新たな取り決めは、忌祭費用の分担という点で従来のゴップゾとなら変わらないようにみえる。だが、その性格は全く異なるものである。仮に長男が事情により自身の客の飲食代を用意できない場合、次男以下がその不足分を肩代わりすることはない。両者の立場が逆であっても同様である。客の飲食代は招待した者が負担するという意識は徹底しており、負担する金額は明確な経済合理性に基づき決定される。

ゴップゾの変化は、ドイモイ下の忌祭をめぐる儀礼的往来が生み出した副産物である。この新たな取り決めについて、次男以下はよく「口の負債を返す」ためであると説明する。忌祭をめぐる儀礼的往来は長男、次男以下のいずれにも発生する。次男以下であっても友人や隣人として、あるいは同僚や商売上の取引相手として忌祭に招かれる。だが長兄から既に忌祭を託された場合を除くと、次男以下は忌祭を受け持つことはできない。つまり彼らは、招かれた際に負った「口の負債を返す」機会をもたないのである。

村人は、ドイモイ以降、少なからぬ数の次男以下がこうした意見をもつことを認めている。他方で、多くの村人は、次男以下には忌祭をめぐる「口の負債」の返済を期待していないともいう。祭祀の継承から外れる彼らの立場を理解し、非難する者などいないと述べるのである。だが、こうした意見は、あくまで招く側の立場にたった意見である。招かれる側の次男以下は「口の負債」を負った社会的劣位な状態の継続

されることを強く意識する。毎年ただ一方的に食べ続けるだけの状態を繰り返す歯痒さを強調するのである。

聞き取りでは、1990年代の半ばに一時期、次男以下のあいだで原付バイクなど高額商品の購入時や毎年旧暦の3月に催される村祭りの期間中に宴会を設け、客を招いて忌祭をめぐる「口の負債」を返済する動きがあったらしい。だが高額商品を定期的に購入し続けることは難しく、また村祭りにはどの家でも宴会を設け、親族や友人を招き合うため招待しても相手が出席できないということが多く、結局は廃れたという。

既に述べたように、宴会を介した儀礼的往来には社交上のルールが適用される。相手を正式に客として招くには、それ相応の理由が必要となる。村ではなんの脈絡もなく宴会に招くことはありえず、招かれた側も応じることはない。招かれた側は往来が一方通行にならぬよう、自分が「口の負債を返す」機会を想定して出席に応じるからである。美味しい食材が手に入ったからと、親兄弟を夕食に招くようにはいかないのだ。そこで、最終的な妥協案として、長兄の主宰する忌祭の場を借りて「口の負債」を返済しようとする次男以下が増加したのである。

だが、こうした経緯を経て定着した「口の負債」返済の方法にも、返済の機会を借りる次男以下からみれば問題が多いという。例えば宴会で振る舞う料理の内容についてである。たとえ彼らが人数分の飲食代を支払うといっても、忌祭の組織全般について最終的な決定権をもつのは主宰者の長男である。そのため次男以下の側では流行りの高級食材を用いたいと思っても、長兄が別のより安価な食材で決めたいといえ、その意見に従わざるを得ない。

多くの次男以下が、とりわけ気にかけるのは兄嫁との関係である。忌祭の組織にあたり、食材の調達など財務関係は主宰者の妻である兄嫁が担当することが多い。彼女は、時には仕事の合間をぬって、より安い食材を求めて遠方の市

場まで足を運ぶ。そのためもあってか、彼女たちは義弟たちの差し出すゴップズの金額には厳しい目を向ける。「弟の意見で採用した仔牛肉は思いの外高く付いたが、彼はそれに見合う分を負担しなかった」という類の批判を、兄嫁が間接的に義弟夫婦に伝えることはよくある話だという。

こうした長兄に対する次男以下の不満は、恐らくベトナムの兄弟関係の特徴を背景にしたものである。祖先祭祀の継承者である長男と、継承から外れる次男以下という長次の区別は明確である。だが、その忌祭をめぐる繰り広げられる社交という場では、両者は互いに独立した経済主体として同等に扱われる。忌祭をめぐる儀礼的往来だからと、同年会会員のうち次男以下だけを招待から外すということはない。さらに冥具業の成功によって、次男以下のなかには長男に勝る経済力を有する者も少なくない。「十分な経済力はあるのに思い通りの社交を実現できない」といった次男以下の不満は、以上のような兄弟関係を踏まえてみると理解できよう。

次節で述べるのは、こうした次男以下の忌祭をめぐる社交の実現への強い要望を背景に、現在の村で急速に浸透しつつある新たな現象である。それは従来からある忌祭分けを形式的に踏襲しつつ、それとは異なる意図を含ませた新しいタイプの忌祭分けの浸透である。

### 社交の場の分離としての忌祭分けの出現

現在、次男以下のなかには長兄から特定の祖先の祭祀を譲り受け、忌祭を組織する者が現れている。その目的は自ら忌祭を主宰し、客を招いて思い通りの饗応を行うことである。いわば社交の場の分離を目的とした忌祭分けである。

このタイプの忌祭の受け渡しは、次男以下の側から長兄に忌祭の分受を願い出ることから始まる。願い出の際、次男以下は、ほぼ定型化した内容の文句を用いる。それは「口の負債」の返済機会がないために、社会的に劣位な立場に

陥った自己の窮状を訴えるものである。1996年、ある三男の男性（51歳）が、幼少期に他界した祖父の弟の忌祭を譲り受けた際の文句を再現してみたい。

「家風」(gia phong) に従えば、私たち次男以下が忌祭を受け持つことは許されません。しかしながら長男に限らず、我々男子は誰でも付き合いがあり、忌祭に招かれれば此処処へと行かねばなりません。子供もみな自立し、経済的な余裕もできました。兄さんにお願ひがあります。どうぞ忌祭をひとつ、譲っていただけませんか。

長男の多くは、弟から申し出があれば社交の場の分離を目的とした忌祭分けに承諾すると述べる。その理由について、彼らは通常、弟たちの心情をくみ「口の負債」の返済を助けるためだと説明する。だが実のところ、長兄が承諾する理由はそれだけではない。ドイモイ下の村で忌祭をめぐる社交の興隆と照応して強まりつつある、祖先祭祀としての忌祭の在り方を見直そうという動きが深く関係している。

忌祭は本来、年に一度、子孫が一同に会し、生前の故人を偲ぶという祖先供養の機会である。従って参加者は、故人との血縁関係を重視し、ゴップゾの責任を負う父系親族が中心となる。聞き取りでは1990年代の後半以降、こうした忌祭の在り方を尊重する一部の村人から、盛大に行う忌祭の定着に代表される、客の増加傾向を危惧する声が出始めたのだという。

彼らが問題視するのは、故人と関わりのない者が参加者の多数を占める状況である。実際、長男の客に加え弟たちの客を招くとなると、父系親族より兄弟の関係者の数が多くなるというケースは少なくない。場合によっては、生前の故人と面識すらない者が会場の一角を占めるといった事態も起こりうる。彼らは、こうした状況を、祖先を軽視した目に余る状況であると強く警戒する。そして主宰者に対し、直接あるいは

間接的に、招待客の数を節度ある範囲内に自制するよう訴える<sup>(17)</sup>。

こうした動きについて筆者が指摘すると、長男の多くは、可能であれば弟たちには客の招待を遠慮してもらいたいと本音を漏らす。だが長男自身も客を招いている手前、弟にだけ制限せよとは言えないという。要するに、ひとつの忌祭で、祖先祭祀の忠実な遂行と満足のいく社交の実現との両立は限界があった。社交の場の分離としての忌祭分けが成立する背景には、次男以下の強い要望だけでなく長男の側の事情もあったのである。

長兄から弟へ譲り渡される祖先は大抵、無祀の傍系祖先や外祖など遠い祖先である。特にゴップゾの責任を負う者のいない祖先が好んで選ばれる。これらの祖先は個別の忌祭を組織されることは稀である。そのため子孫らの記憶に残りにくく村人の関心度も低い。また、そもそも忌祭を必要とするのは次男以下本人であり、次世代にまで引き継がれる保証はない。直系祖先のように祭祀の永続性が厳しく問われる祖先であってはならないのである<sup>(18)</sup>。

通常、次男以下は忌祭分けを願ひ出る前に、家譜や高齢のゾンホ成員の意見を参考にしつつ適当な祖先を探す。次男以下の申し出を見越して、予め長兄が都合のよい祖先を選定しておくこともあるという。さらに近年では、より進んだ例も出始めている。生前の親が、特定の祖先の祭祀の責任を次男以下に与えておくという例である。次に述べる男性タック（64歳）の例は、その典型である。

長男（32歳）は将来、私に代わって父母の祭祀を行う責任がある。次男（27歳）には夭折した私の叔母の祭祀を与えた。次男が「口の負債」で困らないように。彼は若く忌祭に招かれる歳ではないので、いまは命日には家族だけで1マムの供物を用意して焼香するだけのようだ。家庭内のことだから他家のことはわからないが、同様の準備

をしている年寄りが多いのではないか。

ドイモイ以前にも、生前の親が長男以外の息子に特定の祖先の祭祀を受け持たせる例はあった。だが、それは、あくまで祭祀の存続を前提とした分与である。タックのように次男個人の社交のため、それも祭祀の永続制を問わない祖先をあえて受け持たせるなど、当時では考えられなかったであろう。つまり現在の村には、当事者である兄弟だけでなく、親までもが現実の問題として考慮せざるをえないほど、忌祭をめぐる儀礼的往来が定着しているのである。その意味で、社交の場の分離としての忌祭分けはドイモイという時代が生み出した、新しい伝統の創造であるといえる。

#### 4. おわりに

以上、本論では調査村における忌祭の変化を歴史的に跡付けながら、現在観察される忌祭分けが成立する過程について、その背景を含めて考察してきた。

1986年に始まるドイモイ路線の採用は、村における忌祭の在り方に大きな衝撃を及ぼした。各世帯の経済力向上を背景に、祖先の命日を記念して祀る忌祭が、他者との信頼関係を深める社交の場として利用され始めたのである。その結果、忌祭には子孫である父系親族だけでなく、友人や商売関係者など祀り手の個人的な関係者が客として多数参加するようになった。

客の増加は、祖先祭祀の継承者として忌祭を主宰する長兄と、長兄を支える弟たちという従来の忌祭をめぐる兄弟関係にも多大な影響を及ぼした。忌祭の運営にあたり、兄弟のあいだで社交の場の共有を前提とした、経済合理性に基づく費用負担の方法が確立したのである。さらに一部の次男以下から、より主体的な客への響應を実現すべく、社交の場の分離を目的とした忌祭分けを求める動きが出始めた。

他方で、村人の多くはドイモイ以降もなお、祖先供養の場としての忌祭の在るべき姿を重視

している。そして、それはたとえ忌祭をとりまく社会経済状況が変化しても、変えてはならないものとして強く意識されている。だからこそ、故人と無関係の客が多数を占める忌祭状況を祖先軽視であると警戒し、招待客の数を自制する動きが村内から出始めたのであり、また多くの長男が弟からの社交の場の分離の申し出に同意したのである。

現在観察される忌祭分けは、以上のようなドイモイ下に表出した一連の変化と、その水面下で持続してきた伝統との交渉の過程で生み出されたのである。それは、あえて忘却された祖先の祭祀を譲り渡すことで、祖先軽視という批判を回避し、なおかつ次男以下の主体的な社交を実現するという、ドイモイ時代の新たな伝統として成立したのである。

重要なことは現在起こっている現象を理解する上での歴史的視野の必要性である。調査村で観察された忌祭分けは、ドイモイ下の忌祭を如何に多角的に分析しても、その意味するところを正確に把握できない。村における忌祭の歴史的变化のなかに定位する作業を通じて初めて理解できたのである。その際、文字資料によるベトナムの歴史とは別に、当事者である人々が変化をどう捉え、受容し、あるいは抵抗したのかといった現場の声に基づく歴史の考察は不可欠である。本論では北部の一村における忌祭を事例にとり、伝統の持続と変化の一端を論じてきた。同村で発現する諸現象に注目し、その現象を歴史的な動態のなかで定位する試みを通じて、これからもベトナム村落社会の現在を理解していきたい。

#### <注>

- (1) ベトナムにおける分割相続慣行については、以前から女子を含む諸子間の分割相続慣行の存在が知られており [Dao Duy Anh 2002 (1938): 133-135], また近年では末成 [1998: 227-259, 268] がハノイ近郊の村の事例として、分割相続慣行をとることで長男が負う祭祀責任と相続財

- 産とが照応していないという点を指摘している。
- (2) ドイモイ以降、バックニン省では農村管理の見直しの必要から行政村「社」(xa)の下に、独自の単位として「半行政村」(thon)をおく地域が多い。ドンケー半行政村も1990年代の初頭に、ドンホー村と近隣の2村、トゥーケーTu KheとダオトゥーDao Tuの一部を統合して設置されたものである。その行政的機能は地域により多少の幅があるが、ドンケー半行政村を含め、多くは行政上の決定権をもたず、社の決定を実行する役割に限定されている。
- (3) 調査方法は現地の人々と活動を共にしながら資料を得るという参与観察によるものである。一日の調査内容を記せば、家族と朝食を済ませたのちに昼食を挟んで夕食前まで、訪問聞き取り調査を行う。そして夕食後は特別な行事がない限り、その日に集めた資料を整理した。また調査中に催された結婚式や忌祭、葬式などの親族儀礼、村の行事や会合にはできるかぎり参加した。通常、特定の調査地での具体的事例に基づく記述的研究では、調査の対象となった人々の善意の協力を尊重し、調査地名と人名を実名ではなく仮名とすることが多い。だが後述するが、村はベトナムの伝統手工芸品であるドンホー版画の生産地として、研究者に限らず広くその名が知られている。そこで本論では、調査地名に仮名ではなく実名で記すことにした。だが事例研究という性格上、本文中には特定の個人をめぐる個別具体的な事例が数多く登場する。そのため人名については仮名とし、個人のプライバシーを侵害する恐れのある情報は原則として記さなかった。本文中の民俗語彙については、初出の際に日本語の訳語かカタカナ表記をしたうえで、括弧のなかに原語であるベトナム語表記を記した。金額の表記はベトナムの通貨ドンdongでの金額を記し、目安として米ドル換算の金額を加えた。調査時点での14,000ドンは1米ドル相当だった。
- (4) 手動汲み上げ式の場合、井戸は手掘りで地上からの深さは大体5メートル前後である。そのため付近の水田や小川から水が流入するため澄んだ水は望めない。他方、電動式ポンプを用いる井戸の場合、掘削機械を用いて平均で50メートルほど掘る。費用はかかるが手掘り式に比べると格段に澄んだ清潔な水が使用できるといい、村では1990年代の後半になって急速に普及した。
- (5) もっとも経済力の向上を知る指標としては、それぞれの建築費を数値化して比較するほうが適当だろう。だが建築費は家屋の規模や建材の種類により大きく左右されるため情報を得るのが難しく、調査では十分な資料を集められなかった。だが同表で示した新築年数の分布の偏りだけを見ても、各世帯の所得向上が如何に顕著であったかを示せたと思う。
- (6) そのためもあってか現在の村では夫婦世帯の割合が高い。2002年時点における村の世帯類型は、夫婦および夫婦とその未婚の子供からなる夫婦家族世帯が116例と、全体の67%を占める。直系家族世帯は47例(26%)があるが、そのうち4世代世帯は1例のみである。同一世代に2組以上の夫婦をもつ拡大家族はまったくない。また傍系親族を含む世帯は2世帯ある。だが、これらは世帯主の兄弟が幼少時から病弱なため結婚せず同居を続けるなど、事情がある場合に限られる。
- (7) 兄弟に協力を依頼された場合でも、技術の提供など金銭での利害が直接介在しない部分で応えることが多いという。
- (8) 村には独立した祠堂をもつゾンホは1つだけであり、それ以外のゾンホでは族長宅の正祭壇を、ゾンホ全体の祖先を祀る祭壇として用いている。
- (9) 「祈誦」(khan)とは祖先に対し食べ物をすすめ祈拝し疏文を読む(しばしば省略される)所作のことをいう。
- (10) ゴップゾは忌祭が永代続くことがないように、一定の代数を経た時点で終了する。だがゴップゾの終了により、被祭祀者に対する祭祀責任が完全に終わるのではない。彼らは、その存命中は主宰家に対し、グーイテットgui tetと称され

る責任を負う。グーイテットとは差し出すという動詞を意味するグーイと旧正月を意味するテットとの合成語で、旧正月に、主宰者の家に供物を持参し新年の挨拶に訪れることをいう。供物は線香一束(約10円)程度で、高価な品を持参することは滅多にないが、手ぶらで行くことはない。主宰家では、1月3日か4日に新年を祝う宴会「化金」(hoa vang)を催し、グーイテットを受けた全関係者を招く。

- (11) 人類学者 Malarney [1994:186-190] によれば、情感の前提には相手を助け、相手に幸福をもたらす自己犠牲の精神があるとされる。情感はベトナム人の理想とする対人関係の在り方をもっとも的確にあらわす概念である。
- (12) また供物や宴会も簡素化された。村人は当時の忌祭について、よく「最小礼」(le phu tieu)での忌祭と説明する。最小礼とはキンマ1皿、茶碗1杯の酒と水の三品のことで、祈誦を捧げる際に必要な最低限の供物とされる。つまり最小礼での忌祭という場合、特別な料理は用意せず、ごくあり合わせのもので済ませることを意味する。
- (13) ベトナム人の靈魂観に基づくものである。特に非業の死を遂げた者や、夭折した無祀の親族の霊力は強いとされ、崇りを免れるだけでなく、その力を借りて願い事を叶えようとする[末成1995:10-11]。女性の場合「婆姑」(ba co)、男性の場合「翁猛」(ong manh)など特別な名称で総称される。
- (14) 嗣子とは家屋を含む全財産を近親の誰かに相続させ、代わりに自己の祭祀を託すことである。
- (15) 同年会はドイモイ後の村で結成され始めた社会集団であり、設立目的として主に冠婚葬祭時の互助があげられる。そのため中年層や青年層の働き盛りの世代での結成が多く、結婚式や葬式など参加者の多い行事では、父系親族とともに有力な協力要請の対象となっている。
- (16) 特にドイモイ以降は冥具業の発展により、誰もが多忙な生活を送るようになっていく。そのため村人は、隣人たちの時間を拘束することで相手が被る経済的損失をひどく気に掛ける。例

えば特別な用事がない限り、昼間はできるだけ他家を訪問しないよう心がける。来客があれば主人は茶を入れて応対せざるをえず仕事にならないためだ。調査中も、近所の友人の家に遊びに行く子供に対し、親が仕事の迷惑にならぬよう諭す光景がしばしば見受けられた。

- (17) 調査中、参加した忌祭の宴席の場で、「客を招くのであれば、第一に父系親族を優先すべきであり、他の分支を含めたゾンホ全体を招いてなお余裕がある場合に限るべきである」と強硬な意見を述べる者もあった。
- (18) 通常、次男以下は忌祭への招待に向いた際、招待の理由について、「明日は祖先の命日です」(mai la gio cu)と、ただ祖先一般をあらわすcuの命日であるとのみ述べる。招待を受けた側も、命日の主が具体的に誰を指し示すのかを尋ねることはない。招く側と招かれる側の双方が、祖先祭祀としての忌祭ではなく、社交の場としての忌祭であることを了解しているからである。

#### <参考文献>

Dao Duy Anh.

2002 (1938) *Viet nam Van hoa Su cuong*. Ha noi: Nha xuat ban Van hoa Thong tin.

中西裕二

1998 「ベトナムにおける宗族、同居、扶養」奥山恭子ほか編『扶養と相続(シリーズ比較 家族第2期1)』早稲田大学出版部:95-118.

末成道男

1995 「ベトナムの「家譜」『東洋文化研究所紀要』(127):1-42.

1998 『ベトナムの祖先祭祀-潮曲の社会生活』東京:風響社.

(客員研究員)